

李白・杜甫・白居易における〈笑〉表現について（中）

高橋良行

〈目次〉

- 一 はじめに
- 二 唐詩以前の中國古典における〈笑〉表現
- 三 李白における〈笑〉表現
（以上、前號）
- 四 杜甫における〈笑〉表現
（以上、本號。以下、次號予定）
- 五 白居易における〈笑〉表現
- 六 結語

四 杜甫における〈笑〉表現

杜甫の詩における〈笑〉表現を語彙的に見ると、洪業ほか編『杜詩引得』⁽¹⁷⁾によれば次のごとくである（但し、テキストによって用例数は一部異なる）。

笑：29例（熟語も含めた「笑」字は計52例）

談笑：6例 一笑：5例 笑語：2例 含笑：1例

歡笑：1例 自笑：3例 笑樂：1例 語笑：1例

取笑：1例 歌笑：1例 微笑：1例

哂：5例 自哂：2例

哈：1例

嗤：4例

以下、李白と同様に、こうした〈笑〉表現をいくつかの笑いにゆるやかに類別して、作例に即しつつ見ていきたい。

(1) 嘲笑の笑い

杜甫の〈笑〉表現についても、まず目につくのは嘲笑の笑い

である。杜甫自身が他者を嘲笑するものとしては、わずかだが次のようなものがある。

三韻三篇（其三）（卷十四）⁽¹⁸⁾

烈士惡多門 烈士は多門を惡む
小人自同調 小人は自ら調を同じくす
名利苟可取 名利 苟も取るべくんば
殺身傍權要 身を殺すも權要に傍ふ
何當官曹清 何か當に官曹清かるべき
爾輩堪一笑 爾が輩 一笑に堪へたり

永泰元年（七六五）春（五十四歳）、成都の浣花草堂での作。

この年の一月三日、草堂に歸り、その後、劍南節度使・成都尹たる嚴武の參謀の職を辭していた。幕府の諸官に對する胸中の思いを述べたもので、權力者に媚び、追隨する小人（役所の役人たち）をきれいさっぱり追い拂うことができようか、爾ら小人は笑うべきものだ、と痛罵している。

他にも、乾元二年（七五九）秋（四十八歳）、秦州にて左遷されている友人の賈至と嚴武に寄せた「寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻」（卷八）詩には、「小儒輕董卓、有識笑苻堅」（小儒 董卓を輕んじ、有識 苻堅を笑ふ）とある。詩の冒頭に賈至・嚴武二君の現状を述べた後、肅宗に仕えた折の軍事

李白・杜甫・白居易における《笑》表現について（中）（高橋）

情勢を回顧した箇所、杜甫たち朝廷の儒官（「小儒」「有識」は、腹の底では安祿山や史思明（「董卓」「苻堅」）たちを輕蔑し、嘲笑していた、というものである。⁽¹⁹⁾

嘲笑の笑いとしては、嘲笑するよりも、杜甫が他者によって嘲笑されていると詠じる、以下のような作の方が多く見られる。むろん嘲笑といってもその程度は一樣ではないが、それらは杜甫の非現實的な理想主義や俗世、世人らとの非協調性などによっておのずから招いた要素が強い。

醉時歌（卷三）

諸公袞袞登臺省 諸公 袞袞として臺省に登る
廣文先生官獨冷 廣文先生 官 獨り冷やかなり
甲第紛紛厭粱肉 甲第 紛紛 粱肉に厭く
廣文先生飯不足 廣文先生 飯足らず
……

杜陵野客人更嗤 杜陵の野客 人更に嗤ふ
被褐短窄鬢如絲 被褐 短窄 鬢 絲の如し
日糴太倉五升米 日 糴 太倉五升の米
時赴鄭老同襟期 時に鄭老に赴きて襟期を同じくす
得錢即相覓 錢を得れば即ち相ひ覓む
沽酒不復疑 酒を沽ひて復た疑はず

中國詩文論叢 第三十四集

忘形到爾汝 形を忘れて爾汝に至る
 痛飲眞吾師 痛飲 眞に吾が師なり
 ……

杜甫の原注に「贈廣文館博士鄭虔」とある詩で、天寶十三載（七五四）春（四十三歳）、年長の友人である鄭虔と酒を飲み、酔時に贈ったもの。高い道義と文才を有しているながら、卑官に甘んじている鄭虔への熱い共感と同情を述べつつ、そうした鄭虔との年齢を超えた「爾汝の交わり」を活寫している。そのなかで、「杜陵野客」たる杜甫は、丈短く窮屈で粗末な衣を身につけ、白絲のような鬚毛の自分は、世間の人からいっそう嘲笑されていると歌う。嘲笑の理由が、被服や身體によって明示されている。

次は、杜甫の經世濟民の志が嘲笑されたもの。

自京赴奉先縣詠懷五百字（卷四）

杜陵有布衣 杜陵に布衣有り
 老大意轉拙 老大にして 意 轉拙なり
 許身一何愚 身を許すこと一に何ぞ愚なる
 竊比稷與契 竊かに稷と契とに比す
 ……
 窮年憂黎元 窮年 黎元を憂へ

歎息腸内熱 歎息 腸 内に熱す
 取笑同學翁 笑ひを同學の翁に取るも
 浩歌彌激烈 浩歌 彌いよ激烈なり
 ……

天寶十四載（七五五）十一月、長安から妻子をあずけていた奉先縣に赴いた時の感懷を詠じた長編詩。詩は冒頭より、自己を「杜陵布衣」と措定して、自分語りを始めるが、その一節である。古の聖人である稷や契を以て自任し、天子を輔佐して人民を幸福にしたいという宿願を、少年時代の同學たちからは笑われるが、そうした嘲笑を受ければ受けるほど、自分はその志をますます激烈に浩歌するのだ、という。

莫相疑行（卷十四）

男兒生無所成頭皓白 男兒 生まれて成す所無く 頭皓白
 牙齒欲落真可惜 牙齒 落ちんと欲す 眞に惜しむべし
 憶獻三賦蓬萊宮 憶ふ 三賦を獻ず蓬萊宮
 自怪一日聲烜赫 自ら怪しむ 一日 聲 烜赫たりしを
 集賢學士如堵牆 集賢の學士 堵牆の如し
 觀我落筆中書堂 觀る 我が筆を落とす中書堂
 往時文彩動人主 往時 文彩 人主を動かす

此日飢寒趨路旁

此の日 飢寒 路傍に趨る

晚將末契託年少

晩に末契を將つて年少に託す

當面輸心背面笑

當面には心を輸し 背面には笑ふ

寄謝悠悠世上兒

寄謝す 悠悠世上の兒

不爭好惡莫相疑

好惡を爭はず 相ひ疑ふこと莫かれ

これは、永泰元年（七六五）春、成都にて嚴武の幕僚であった時か、または辭職後の作。先に挙げた「三韻三篇」とほぼ同時の作だが、笑いの主體が反轉している。杜甫の詩には、肅宗の朝廷で左拾遺の官にあった時の榮光が繰り返し回顧されるが、この詩の第三―七句もその例のひとつ。今は白髮、落齒の齡となった自分に對して、幕府の若い同僚たちは、面と向かつては誠實そうに振る舞うが（輸心）、陰では自分をあざ笑っているのだ、という。幕府内での杜甫へのまなざしを、杜甫がどのようにとらえていたかが良くわかる。

次は、晩年の長江漂泊のなかで受けた嘲笑。

贈蘇四僎（卷十八）

……

乾坤雖寬大

乾坤 寬大なりと雖も

所適裝囊空

適く所 裝囊空し

肉食晒菜色

肉食 菜色を晒ひ

李白・杜甫・白居易における「笑」表現について（中）（高橋）

少壯欺老翁 少壯 老翁を欺る

……

大曆元年（七六七）（五十五歲）、夔州にて、荊州・揚州の方へ行こうとする友人の蘇僎に贈った詩。蘇僎とは五年ぶりに再會したが、兩者ともに漂泊の身の上で、杜甫が自己の貧窮、寄食の情況を語るくだりである。肉を食べ顔色の良い權勢ある者は、野菜ばかり食べていて顔色の悪い貧者を晒い、少壯の若者は多病の老人をあなどる、と嘆いている。むろん、「菜色」「老翁」は杜甫自身を指す。²⁰

これらの他に、天寶七載（七四八）（三十七歲）、長安にて河南の尹、韋濟に寄せ奉った「奉寄河南韋尹丈人」（卷一）詩には、「謬慚知薊子、眞怯笑揚雄（謬つて慚づ 薊子を知るに、眞に怯る 揚雄を笑はんことを）」とある。隱逸の道に傾倒して、未だ處世の定まらぬ自己の近況を述べた上で、韋濟が、後漢の方術家薊子訓が朝廷の公卿たちから禮遇されたように、私を知遇してくれるのはありがたいが、世人が、後輩に笑われた揚雄のように私をあざけり笑うことを、眞に恐れている、という。

また、乾元二年（七五九）十月、秦州から同谷に赴いた折の紀行詩十二首の其二「赤谷」（卷八）には、「貧病轉零落、故鄉不可思。常恐死道路、永爲高人嗤（貧病 轉零落す、故郷思ふ可からず。常に恐る 道路に死して、永く高人の爲に嗤はるるを）」

中國詩文論叢 第三十四集

とある。貧窮と病氣によって落魄した自分は、途中でのたれ死にをして、高人（隱者など、世俗に超越した高德ある人）のものと笑いになりはせぬかと恐れている、というのである。ちなみに、杜甫の胸中には、のたれ死に對する一種の恐怖心が一貫してあったらしく、「填溝壑」「死道路」といった表現が、他の詩人に比べて目につく。それはさて、この句は、他者からの嘲笑を詠じているという點では、他の用例と同じだが、小人とか世間一般の人ではなく、高德の人という點が新しい。この時、杜甫の腦裏には具體的に思い浮かぶ人々がいたのであろうか。

こうした發想は、廣德二年（七六四）春（五十三歲）、梓州から成都の浣花草堂に歸って作られた「水檻」（卷十三）詩の「扶顛有勸誡、恐貽識者嗤（扶顛 勸誡有り、恐らくは識者の嗤を貽さん）」にも見られる。杜甫が魚釣り用に増設した水亭の欄干が傾いているが、修理せずに放っておけば、『論語』『季子』篇の「扶顛」の故事を知らぬ者として、有識者からそしられるであろう、というもの。『論語』では、孔子が弟子の冉有や季路に對して、國家の補佐役としての心構えを説くなかで用いられており、それを大仰に水檻の修理に言うのは、杜甫のユーモアであろう。これなどは深刻な嘲笑の笑いではないが、「識者」からという點が「赤谷」詩と通じるものがある。

また、大曆三年（七六八）秋、江陵にての作「秋日荆南述懷三十韻」（卷二十一）詩には、「休爲貧士歎、任受衆人咍（貧士

の歎を爲すことを休め、衆人の咍を受くるに任す）」とある。荆南に流寓する落魄の日々の思いを述べたものだが、身を嘆くことはせず、世の衆人の笑うにまかせている、と少し歌いぶりが變わっている。

さらに、大曆五年（七七〇）春（五十九歲）、潭州にて重表姪の王珣が、南海（廣州）に使いに行くのを送った詩「送重表姪王珣評事使南海」（卷二十三）には、「亂離又聚散、宿昔恨滔滔。水花笑白首、春草隨青袍（亂離に又た聚散す、宿昔 恨 滔滔たり。水花 白首を笑ひ、春草 青袍に隨ふ）」とある。

王珣はたんなる親族（杜甫の曾祖母が王珣の曾祖父の妻）ではなく、杜甫の命の恩人でもあった。天寶十五載夏、安史の亂を避けて、杜甫が、家族を帶同して白水から北へ避難する途中、左馮翊で動けなくなった時、引き返してきた王珣は自分の馬に杜甫を乗せ、身を挺して救ってくれたのである。²¹十四年後の今、評事となっていた王珣と再會し、また離別するにあたって、水邊の花は、白頭の私を笑っているが、沿道の春の若草は、青袍に身を包んで旅行くお前に隨うようだ、とその前途を祝している。この「笑」は嘲笑というほどではないかもしれないが、一種の擬人化であり、花に笑われるという表現は、李白には比較的多く見られたが、杜甫としては珍しい。

(2) 自嘲の笑い

次に、明白に自嘲的なものとしては、次のような作が見られる。

狂夫（巻九）

萬里橋西一草堂	萬里橋西一草堂
百花潭水即滄浪	百花潭水即滄浪
風含翠篠娟娟淨	風は翠篠を含みて 娟娟として淨く
雨裏紅蕖冉冉香	雨は紅蕖を ^{うら} 裏して 冉冉として香し
厚祿故人書斷絕	厚祿の故人 書斷絶
恆飢稚子色淒涼	恆飢の稚子 色淒涼
欲填溝壑唯疏放	溝壑に填せんと欲するも 唯だ疏放なり

自笑狂夫老更狂

自ら笑ふ 狂夫 老いて更に狂なるを

これは上元元年（七六〇）夏頃（四十九歳）、成都の浣花草堂での作。高祿を食んでいる舊友からの手紙（援助）も途絶え、いつも飢えている子どもらの顔色はますます悪く、悲しげである。私は、のたれ死にしようにも關わらず、世離れして氣ままに暮らしている。元來、狂夫たる自分が、老來、ますます狂氣じみてきたかと、我ながらおかしくなる、と歌っている。中國

李白・杜甫・白居易における〈笑〉表現について（中）（高橋）

古典における「狂」は、權力から身を守るための佯狂とか、世俗と相容れぬ孤高の精神などを内在するものとして、古來、複雑な意象の重層化がされており簡單ではないが、ここでは杜甫の自由な精神というよりも、不隨な自己に對するどうしようもなさのようなものを感じられる。⁽²²⁾

次は、大曆三年（七六八）冬（五十七歳）、公安での作。

久客（卷二十二）

羈旅知交態	羈旅 交態を知り
淹留見俗情	淹留 俗情を見る
衰顏聊自哂	衰顏 聊か自ら哂ふ
小吏最相輕	小吏 最も相輕んず
……	

杜甫はこの年の正月に夔州を去って江陵に至り、秋には公安に來て、年末には岳陽に下るといふ移動に明け暮れた一年であった。友人や知人らの援助に頼るしかなかった最晩年の杜甫にとって、各地を轉々とする客居の生活は、移ろいやすく薄情な人情に觸れざるを得なかったであろう。そうしたなかで、地元の小役人たちから最も露骨に輕んぜられたが、それもそのはず、老いさらばえた私の顔を見れば無理もない、と自嘲しているのである。

中國詩文論叢 第三十四集

古代中國の士人社會には、優れた人物は才徳の他に、容貌や體軀、言語、舉止なども優れているはずという一種の通念があったので、小役人たちが杜甫の衰顔を見て蔑視したとしても不思議ではなかった。「聊」「自」の二字に、小役人への怒り以上に、納得せざるをえない杜甫の心理が透けている。それにしても、自己の老いを嘆くいわゆる「嘆老」の詩は唐詩に屢見するが、衰顔を自笑する詩はそれほど多くはなからう。

また、「蘇端薛復筵簡薛華醉歌」（卷四）詩には、「少年努力縱談笑、看我形容已枯槁（少年 努力して談笑を縱^{はな}にす、看我 我が形容 已に枯槁せるを）」とある。天寶十五載（七五六）正月（四十五歳）、長安にて、新たに友人となった蘇端・薛復の宴席で、薛華に手紙代わりに寄せた戯れの詩。宴席の若者らはつとめて談笑に興じているが、見るが良い、私の容貌は既に枯れ木のようになってしまったのを、と詠じている。この談笑は杜甫の笑いではないが、若者たちの談笑の前に自己の衰えた容貌を對置するところに、杜甫の軽い自嘲が見て取れよう。

(3) 自得の笑い

明白な自嘲の笑いは、李白同様に案外少なく、むしろ目につくのは、以下のような微笑、諧謔的、自得的な笑いである。

九日藍田崔氏莊（卷六）

老去悲秋強自寬 老い去きて 悲秋に強ひて自ら寛うす
興來今日盡君歡 興來つて 今日 君が歡を盡す
羞將短髮還吹帽 羞づらくは短髮を將つて還た帽を吹か
るを

笑倩傍人爲正冠

笑ひて傍人に倩ひて爲に冠を正さしむ

藍水遠從千澗落

藍水 遠く千澗從り落ち

玉山高竝兩峰寒

玉山 高く兩峰を竝べて寒し

明年此會知誰健

明年 此の會 誰か健やかなるを知らんや

醉把茱萸仔細看

醉うて茱萸を把りて仔細に看る

この詩は、乾元元年（七五八）九月九日（四十七歳）、華州司功參軍の時、長安の南、藍田縣にある崔氏（崔季重。王維の舅父の子）の別莊（東山草堂）にて作ったもの⁽²³⁾。いわゆる「孟嘉落帽」の故事を翻案した表現で、かぶっていた帽子を風に吹き飛ばされ、老いて薄い髪の毛が露わになっては恥ずかしい。そうならぬように、この帽子を傍らの人に頼んできちんとかぶらせてもらうのも、我ながらおかしい、というものである。

最終二句では、來年のこの嘉會における健在者を予想して、茱萸を見つめる杜甫の姿が描かれるだけに、よけいこの第三、四句の諧謔性が際立っている。吉川幸次郎「九日」は、次のよ

うに言う。「この句その最もの妙處は、「笑」の字にあるであらう。四十を過ぎてなお不遇な人の口邊に、往々にして浮かぶ笑い、またもし丈夫は四十を過ぎれば、何がしかの牢騷を抱かぬはないとすれば、おおむねの「老去」の人の口邊に浮かぶ笑い、そうした笑いを、杜甫もいま口邊に浮かべつつ、風になぶられた冠のゆがみを、じっとおとなしく、隣席の人に直してもらっている。何くれとない身邊の瑣事のなかに、人生の祕密を發見し得ている點に於いて、この詩はもはや習作ではない」と。⁽²⁴⁾

次は、廣徳元年（七六三）冬（五十二歳）、梓州の山寺に刺史の章彝に同行した折の作。

山寺（卷十二）

……

窮子失淨處	窮子	淨處を失す
高人憂禍胎	高人	禍胎を憂ふ
歲晏風破肉	歲晏	肉を破る
荒林寒可迴	荒林	寒くして 迴るべし
思量入道苦	思量	入道の苦しきを
自哂同嬰孩	自ら哂ふ	嬰孩に同じきを

古びて荒れかけた山寺の様子、章彝のお布施の氣前の良さなどを描寫した後、佛道に入ることの難きを思う自分の無知な考

李白・杜甫・白居易における〈笑〉表現について（中）（高橋）

えが、まるで子供の考えと同じようだと、我ながらおかしくなる、というものである。

戲作俳諧體遣悶二首（其二）（卷二十）

西歷青羌坂	西のかた青羌の坂を歴
南留白帝城	南のかた白帝の城に留まる
於菟侵客恨	於菟 客恨を侵す
粗妝作人情	粗妝 人情を作す
瓦卜傳神語	瓦卜 神語を傳へ
畚田費火耕	畚田 火耕を費やす
是非何處定	是非 何れの處にか定まらん
高枕笑浮生	高枕 浮生を笑ふ

これは大曆二年（七六七）（五十六歳）、夔州にて、戯れに俳諧體を用いて、胸中の憂悶をはらった詩。其一・二ともに、夔州の土着の異様な習俗や農耕法に驚き、其一では、人々の表と裏を使い分ける心根を疎みつつも、他所とどちらが良いかは決めがたく、自分は高枕して人生とは妙なものだと思っている、というものである。

他にも、天寶十二載（七五三）春（四十二歳）、長安城の南、韋曲の西にあった何將軍の園林に、老友鄭虔のお供をして遊んだ折の連作「陪鄭廣文遊何將軍山林十首（其十）」（卷二）には、

中國詩文論叢 第三十四集

「自笑燈前舞、誰憐醉後歌。祇應與朋好、風雨亦來過（自ら笑ふ 燈前の舞、誰か憐まん 醉後の歌。祇だ應に朋好と、風雨にも亦た來り過るべし）」という。園遊も果て、歸途につこうとして立ち去りがたい思いを述べたもので、燈前で舞いだしたことを思い出しながら笑っている、というものである。この園遊はよほど杜甫の氣に入つたものらしく、一年後、杜甫から何將軍に手紙を書いて、再訪している。

また、乾元元年（七五八）春、長安にて詩友の畢曜に贈つた「贈畢四曜」（卷六）詩には、「同調嗟誰惜、論文笑自知。流傳江鮑體、相顧免無兒（同調 嗟 誰か惜しまん、論文 笑ひて自ら知る。流傳せん 江鮑の體、相顧みるに 兒無きを免かる）」とある。文才をもちながら困窮する畢曜に同情しつつ、自己と波長を同じくする畢曜と文を論じていると、お互いに笑つておのずからその眞の趣を了解するのだ、というものである。互いの人格と文學的趣向への共感、共鳴による笑いといえよう。

さらに、大曆三年（七六八）春、約二年間住んだ夔州に別れを告げ、瞿塘峽を出た船旅の様子を歌つた「大曆三年春白帝城放船出瞿塘峽久居夔府將適江陵漂泊有詩凡四十韻」（卷二十一）詩には、「意遣樂還笑、哀迷賢與愚（意 遣りて 樂しみて 還た笑ふ、哀へては迷ふ 賢と愚と）」という。瞿塘峽から松滋に至るまでの、刻一刻と變化する兩岸の奇岩絶壁、奔流激灘の有様を舟中から描寫した前半は、秦州から成都に赴いた時の紀行詩

の迫眞性と相通じるものがある。舟行の憂鬱も、江面の開けた松滋に至つて晴れ、樂しみ笑っている。衰えれば、心の迷いは愚者でも賢者でも同じことなのだ、という。

以上、自得の笑いは、いずれも杜甫が自己を少し離れたところから眺める視線によって生まれたものである。

(4) 談笑の笑い

杜甫にも、微苦笑や自得の笑いよりも明白な、友との談笑など他者との交流から生じる楽しい笑いも描かれている。たとえば以下のような作。

苦雨奉寄隴西公兼呈王微士（卷三）

今秋乃淫雨 今秋 乃ち淫雨

仲月來寒風 仲月 寒風來る

群木水光下 群木 水光の下

萬家雲氣中 萬家 雲氣の中

所思礙行潦 思ふ所 行潦に礙けらる

九里信不通 九里 信通ぜず

悄悄素滄路 悄悄たり素滄の路

迢迢天漢東 迢迢たり天漢の東

願騰六尺馬 願はくは六尺の馬を騰げ

背若孤征鴻 背にして孤征の鴻の如く

劃見公子面 劃として公子の面を見

超然歡笑同 超然として歡笑を同じくせん

…

これは、天寶十三載（七五四）秋、長安では二ヶ月ほど長雨

が續き、交通も途絶して自由な往來もできないなか、隴西公李瑀（讓皇帝李憲の子、玄宗の甥）に寄せ、兼ねて共通の友人である王徴士に呈した詩。同じ長安に住む李瑀とは九里しか離れていないのに、手紙も通じず、白き澹水に隔てられている李瑀の住む屋敷は、まるで天の川の東にあるようだと思っている。願わくは六尺の馬を躍らせて鴻のごとく飛んで行き、隴西公のお顔をはっきりと見て、長雨の鬱陶しさを忘れて語り合い、歡笑をともにしたい、と訴えている。友と會い、楽しく談論することへの熱い思いがほとばしるような句である。

貽華陽柳少府（卷十五）

繫馬喬木間 馬を繫ぐ 喬木の間

問人野寺門 人に問ふ 野寺の門

柳侯披衣笑 柳侯 衣を披いて笑ふ

见我顔色溫 我を見て 顔色溫なり

竝坐石堂下 竝び坐す 石堂の下

李白・杜甫・白居易における〈笑〉表現について（中）（高橋）

俯視大江奔 俯して視る 大江の奔るを

火雲洗月露 火雲 月露に洗はれ

絕壁上朝暾 絕壁に朝暾^{てうたん}上る

…

これは、大曆元年（七六六）、夔州にて、華陽縣の柳少府を

訪ねて贈った詩。當時、柳は杜甫の住まいから四、五里のところ客居しており、お互いを認め合う知己であった。夏も末のある早朝、杜甫が人に尋ねながら柳の住む山寺を訪れると、柳は着物をひっかけながら出てきて笑い、私を見るその顔つきはおだやかであった、というものである。當時の氣を許しあった文人相互の訪問時の情景が、目に浮かぶようである。

次は、大曆の初め、夔州にて酒に酔って落馬し、怪我をしたところ、朋友らが酒を携えて見舞いに來てくれたことに感じて作った詩。

醉爲馬堅諸公攜酒相看（卷十八）

甫也諸侯老賓客 甫也^や 諸侯の老賓客

罷酒酣歌拓金戟 酒を罷めて 酣歌 金戟を拓^とる

騎馬忽憶少年時 馬に騎りて 忽ち憶ふ少年の時

散蹄迸落瞿塘石 蹄を散じて迸落す 瞿塘の石

白帝城門水雲外 白帝城門 水雲の外

中國詩文論叢 第三十四集

低身直下八千尺 身を低くすれば直下八千尺

……

明知來問腆我顏 明知來り問ふとき 我が顔を腆くし

杖藜強起依僮僕 藜を杖き強ひて起きて 僮僕に依る

語盡還成開口笑 語盡きて還た成す 口を開きて笑ふを

提攜別掃清溪曲 提攜 別に掃ふ清溪の曲

酒肉如山又一時 酒肉 山の如き 又た一時

初筵哀絲動豪竹 初筵 哀絲 豪竹を動かす

……

杜甫は、夔州刺史柏中丞（柏茂琳）の宴席に出た後、若い頃の勇ましい血が騒ぎ、白帝城門外の急な坂道などを馬で疾驅したが、馬がけつまずいて轉倒し、杜甫も怪我をしてしまった。しかし、朋友らが見舞いに來てくれるのを知って、無理矢理起き上がり、彼らを出迎えた杜甫は、彼らの慰めの言葉が終わると、おのずから口を開いて心から笑い、江邊の一角に場所をしつらえて一場の宴會となった、というものである。

次も大曆二年（七六七）春、夔州の西閣から赤甲山の麓に居を移し、諸友への思いを述べた詩。この詩の直前に「入宅三首」を作っており、新居に入居後の感慨を述べているが、その續編ともいふべき作。

赤甲（卷十八）

卜居赤光遷居新 居を赤甲に卜して 遷居新たなり

兩見巫山楚水春 兩たび見る 巫山楚水の春

炙背可以獻天子 炙背 以て天子に獻すべし

美芹由來知野人 美芹 由來 野人知る

荊州鄭薛寄詩近 荊州の鄭薛 詩を寄するに近く

蜀客鄧岑非我鄰 蜀客の鄧岑 我が鄰に非ず

笑接郎中評事飲 笑ひて郎中評事に接して飲み

病從深酌道吾眞 病みて深酌従り吾が眞を道ふ

「炙背」「美芹」は、『列子』の故事以來、田夫野人の幸福（口福）であった。江陵の少尹鄭審や石首縣令薛據は、ここより近いので詩を寄越してくれるが（詩の唱和ができるが）、梓州刺史の鄧昂や嘉州刺史の岑參は、蜀の地とはいえ離れているので隣同士というわけにもいかない。そこで、身近にいる吳郎中や崔評事を笑って出迎え、病氣にもかかわらず酒を飲み、我が胸中の本心を吐露するのである、という。わずか後半四句のなかに、六名の友人が詠じられており、轉居後の杜甫の心中の一端がうかがえよう。

他にも、廣德二年（七六四）春、成都にて司馬山人に寄せた詩「寄司馬山人十二韻」（卷十三）には、「關内昔分袂、天邊今轉蓬。驅馳不可說、談笑偶然同（關内 昔 袂を分つ、天邊

今 轉蓬なり。驅馳 説く可からず、談笑 偶然同じ」とある。昔、長安で一別した司馬山人と成都で再會し、楽しく談笑できたのは偶然のことだ、というものである。

また、大曆二年（七六七）、峽州刺史の劉伯華に寄せた詩「寄劉峽州伯華使君四十韻」（卷十九）にも、「迴首追談笑、勞歌踟躕興（迴首 談笑を追ふ、勞歌 寢興に踟躕す）」という。祖父同土（劉允濟と杜審言）が則天武后に仕えた往時を説き、劉の文才をたたえつつ、かつて劉と談笑したことを追想し、今の自分は、日夜、歌吟に意を用いながら、ここに滞留している、という。

なお、同じく回想のなかの笑いではあるが、やや視点を變えたものとして、「至日遣興奉寄北省舊閣老兩院故人二首（其一）」（卷六）詩には、「無路從容陪語笑、有時顛倒著衣裳（從容として語笑に陪するに路無し、時に顛倒して衣裳を著くる有り）」とある。これは、左拾遺から華州司功參軍に事實上左遷された後、都の門下・中書省の知友らに送った詩で、もはやかつてのような彼らと楽しく語り合いながら笑うことはない、という杜甫の孤獨な現在が描かれている。

また、「九日五首（其四）」（卷二十）詩には、「他時一笑後、今日幾人存（他時 一笑の後、今日 幾人か存する）」、かつて笑いあった人は、今幾人現存しているようか、という。「存歿口號二首（其二）」（卷十六）詩でも「玉局他年無限笑、白楊今日幾

李白・杜甫・白居易における〈笑〉表現について（中）（高橋）

人悲（玉局 他年 無限に笑ふ、白楊 今日 幾人か悲しむ）」といひ、今は亡き道士の席謙と對局したかつての楽しい笑いが回想されている。

(5) 家族との笑い

さて、以下は、以上の類別とは基準が異なるが、杜甫に特徴的な〈笑〉表現として目につくものは、家族との関わりのなかから生まれた笑いである。

寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻（卷八）

……

古人稱逝矣	古人 逝矣と稱す
吾道卜終焉	吾が道 終焉を卜す
隴外翻投跡	隴外 翻つて跡を投ずれば
漁陽復控弦	漁陽 復た弦を控く
笑爲妻子累	妻子の爲に累はさるるを笑ひ
甘與歲時遷	甘んじて歲時と與に遷る
親故行稀少	親故 行ゆく稀少なり
兵戈動接連	兵戈 動もすれば接連す
他鄉饒夢寐	他鄉 夢寐饒し
失侶自述遭	侶を失ひて 自ら述遭なり

中國詩文論叢 第三十四集

多病加淹泊 多病 淹泊えんぱくを加へ
 長吟阻靜便 長吟 靜便を阻せらる
 ……

これは既に「(1) 嘲笑の笑い」で擧例した長編詩の最後の一段である。なぜか華州司功參軍の官を棄て、隴外(秦州)の地まで逃れてきた杜甫だが、妻子に煩わされることをおかしく思いながら、時間の経過のままに過ごすことに甘んじている、というものである。この「笑」は次句の「甘」とつながる甘受の笑いであろう。もっとも、妻子にわずらわされるとは、あくまで杜甫の身勝手な視點であり、妻子から見れば流浪の旅に出るのは、官を棄てた杜甫のせいということになる。それはともかく、家族を帶同しての旅は、既に天寶十五載、五月以降、反亂軍を避けて奉先縣から白水縣、更に鄜州三川縣への逃避行で経験してはいた。しかし、今、棄官した身で長安から秦州まで移ってきて、改めて家族郎黨を帶同する旅の大變さを再認識したと思われる。

ちなみに、秦州では、この二人の他に李白や鄭虔、高適、岑參、弟ら多くの親しい人々を思ふ詩を作っているが、「親故行稀少」句以下に、その理由が吐露されている。秦州行が、杜甫の人生にとって一大轉換點であったことが、この詩からもうかがえよう。

次は、妻子に笑われる自己を描いたもの。

赴青城縣出成都寄陶王二少尹(卷十)

老恥妻拏笑	老いて妻孥に笑はるるを恥ぢ
貧嗟出入勞	貧にして出入に勞するを嗟 <small>なげ</small> く
客情投異縣	客情 異縣に投じ
詩態憶吾曹	詩態 吾が曹を憶ふ
東郭滄江合	東郭 滄江合し
西山白雪高	西山 白雪高し
文章差底病	文章 底 <small>なん</small> の病をか差 <small>い</small> さん
回首興滔滔	首を回らして 興滔滔 <small>い</small> たり

上元二年(七六一)秋(五十歳)、成都から青城縣に赴こうとして、陶・王ふたりの少尹(未詳)に寄せた詩。自分は年老いて妻子に笑われるのを恥じている。貧乏なために、家から出たり入ったりとその對策に苦勞していることを嘆かわしく思う、というのである。實際には、生計のために汲々とする杜甫を、妻や子があざ笑うことはあり得ないのだが、それゆえよけいに杜甫の自意識はそうした自分を恥じているのである。ちなみに、次に擧げる「自閬州領妻子卻赴蜀山行三首」詩の其二にも、「何日干戈盡、飄飄愧老妻」とある。

つぎは、家族そろつての險しい旅路から生まれた笑い。

自閩州領妻子卻赴蜀山行三首（其三）（卷十三）

行色遞隱見 行色 遞たがひひに隱見し

人烟時有無 人烟 時に有無

僕夫穿竹語 僕夫 竹を穿ちて語り

稚子入雲呼 稚子 雲に入りて呼ぶ

轉石驚魑魅 石を轉じて魑魅を驚かせ

捫弓落狄鼯 弓を捫はじきて狄鼯いろうこを落とす

眞供一笑樂 眞に一笑の樂に供す

似欲慰窮途 窮途を慰めんと欲するに似たり

廣德二年（七六四）二月、閩州から妻子を率いて蜀の成都に

向かい、山路を通った時の作。成都まで地圖上の直線距離で二百余kmあり、おそらくまっすぐ西に向かったのであろうとされる。其一は長い旅路への不安、其二は旅路の困難と妻への申し譯なさを詠じているが、其三では山行中の子供たちの無邪氣な様子を描寫している。

従僕たちは、竹林を抜けながら互いに言葉を交わし、幼子たちは、登り行く道が雲のなかに入ると大聲で叫んだりする。また、石を轉がして物の怪を驚かせたり、弓を弾いて狄（猿）や鼯（ムササビ）を落としたりする。これらのことはほんの一笑するだけの楽しみに過ぎないのだが、彼らはこんなことで先行

李白・杜甫・白居易における〈笑〉表現について（中）（高橋）

きのわからぬ旅路の憂さを慰めようとしているかのようだ、というのである。子供たちの無邪氣な遊びに、實は他ならぬ杜甫自身が救われているのであろう。

幼い子供たちとの關係で言えば、秦州での作と思われる「從人覓小胡孫許寄」（卷八）詩には、「預晒愁胡面、初調見馬鞭（預め晒ふ 愁胡の面、初調 馬鞭を見ん）」という面白い表現もある。子供たちのために知人から南方の「小胡孫」（小さな猿）をもらうことになり、しつけの最初に鞭を當てられる様子を想像すると、今からおかしくて晒いそうだ、というものである。

次は、杜甫と宗武との親子關係が生み出した笑い。

元日示宗武（卷二十一）

汝啼吾手戰 汝は吾が手の戰おののくに啼く

吾笑汝身長 吾は汝が身の長たながきを笑ふ

處處逢正月 處處 正月に逢ひ

迢迢滯遠方 迢迢 遠方に滯る

飄零還柏酒 飄零 還た柏酒

衰病只藜床 衰病 只だ藜床

訓諭青衿子 訓諭す 青衿の子

名慚白首郎 名は慚づ 白首の郎

賦詩猶落筆 賦詩 猶は落筆

獻壽更稱觴 獻壽 更に稱觴

中國詩文論叢 第三十四集

不見江東弟 見ず江東の弟

高歌淚數行 高歌 淚數行

大曆三年（七六八）元旦、次男の宗武に示した詩。杜甫の手が病氣（中風）のために震えるのを見て泣く宗武に對して、杜甫は宗武が成長して背も高くなったことを喜び笑っている、というものである。詩は、漂泊、衰病の身の上や宗武とのやりとり、不在の弟などについての言及が續くが、この時、宗武は十五歳ぐらいで、いわば學に志すべき年齢であり、小さな子供というわけではなかった。つまり、この「啼」は幼いがゆえではなく、老いた父を心配する成長した息子の孝心の表れである。そして、この「笑」は、杜甫の父親としての穩やかな慈愛のまなざしである。

それにしても、兄の宗文に比べて、杜甫の宗武に對する偏愛は、幼兒の頃より顯在していたが、晩年になってますます明瞭になっているようである。杜甫は、この詩の直後に「又示宗武」詩を作り、文學のみならず、經學を修める必要を説いている。兄より聰明な宗武に對しては、科擧の受験や任官といった將來圖を描いていたのかもしれない。

次は妻子ではないが、弟を思う詩のなかにも笑いが描かれている。大曆二年（七六七）冬、弟の觀が藍田縣に行つて妻を娶り、江陵に歸着したという手紙を受け取つて寄せた詩。

舍弟觀赴藍田取妻子到江陵喜寄三首（其二）（卷二十一）

……

歡劇提攜如意舞

歡はなだび劇はなだしくして 提攜して如意の舞

をせん

喜多行坐白頭吟

喜び多くして 行坐 白頭の吟をす

巡簪索共梅花笑

簪を巡り 梅花と共に笑はんことを索

むれども

冷蕊疏枝半不禁

冷蕊疏枝 半ば禁たへず

三首全編に、愛する弟が無事に妻を娶ったことや手紙を得たことの喜びに溢れており、江陵に行つて弟といっしょに住みたい氣持ちまで述べられている。あまりの喜びに「如意の舞」を踊りたいほどであり、立ったり座ったりして白髪頭で詩を吟じている。軒端を巡つて梅の花を探し、梅の花といっしょに笑いたいほどだが、あいにく枝にまばらな状態でまだ咲きそろつておらず、半ば共に笑えないのが残念だ、と述べている。花と共に笑う、というのも珍しい表現であらう。⁽²⁸⁾

(6) 美女・天子・隱者の笑い

最後に、杜甫との關係性が希薄な他者による〈笑〉表現につ

いて見ておこう。たとえば、李白に顯著に見られた〈美女の笑い〉は、杜甫においては少なく、以下の二、三首ほどである。

哀江頭（巻四）

……

昭陽殿裏第一人 昭陽殿裏 第一の人
同輦隨君侍君側 輦を同じくして君に随つて 君側に侍す

輦前才人帶弓箭 輦前の才人 弓箭を帶ぶ

白馬嚼齧黃金勒 白馬嚼齧す 黃金の勒

翻身向天仰射雲 身を翻して天に向つて仰ぎて雲を射る

一笑正墜雙飛翼⁽²⁹⁾ 一笑 正に墜つ雙飛翼

明眸皓齒今何在 明眸皓齒 今 何にか在る

血污遊魂歸不得 血汚して 遊魂 歸り得ず

……

至德二載（七五七）春、曲江にて、玄宗たちが曲江ほとりの離宮、芙蓉園に臨幸した折の榮華のさまを回想したもの。玄宗と楊貴妃が同乗する輦の前で、先驅を勤める馬上の女官が雲に向かって矢を射かけると、にっこりと笑う楊貴妃の眼前に、雌雄一對の鳥が落下したという、劇的かつ暗示的なシーンである。この「一笑」は、繪に描いたような印象的な美女の笑いである。

李白・杜甫・白居易における〈笑〉表現について（中）（高橋）

他に、乾元二年（七五九）秋冬の頃、秦州の山中で夫に棄てられて零落した一夫人を見て作った「佳人」（巻七）詩には、「但見新人笑、那聞舊人哭（但だ見る 新人の笑ふを、那ぞ聞かんや 舊人の哭するを）」とある。浮氣者の夫が新しく若い美人を迎え入れ、その女のうれしそうな笑顔を見るのみで、もとの妻が泣き悲しんでいるのが聞こえないのであろうか、と同情を寄せている。

また、寶應元年（七六二）（五十一歳）、成都で歌妓の舞を見て作った「即事」（巻十）詩には、「笑時花近眼、舞罷錦纏頭（笑ふ時 花 眼に近く、舞ひ罷みて 錦 頭に纏ふ）」とある。歌妓が笑う時は花の枝を目に近づけて愛らしく、舞い終われば御祝儀の錦を頭にまとして引き下がる。これもまた繪に描いたような美女の笑いである。⁽³⁰⁾

一方、李白同様、〈天子の笑い〉を描いたものとして、以下のような作がある。

奉同郭給事湯東靈湫作（巻四）

……

坡陀金蝦蟆 坡陀^{はだ}たる金の蝦蟆

出見蓋有由 出見^{しうけん}するに 蓋し由有り

至尊顧之笑 至尊 之を顧みて笑ひ

王母不遣收 王母 收め遣めず

中國詩文論叢 第三十四集

復歸虛無底 復た虚無の底に歸し

化作長黃虬 化して長き黃虬と作る

……

天寶十四載（七五五）十月（四十四歲）、給事中の郭が驪山の東にある靈湫について作った詩に和したもの。様々な吉祥が續くなか、靈湫に現れた巨大な金色の蝦蟇（安祿山に比す）を顧みて、至尊（玄宗）もお笑いになり、西王母（楊貴妃）もその蝦蟇を捕まえさせようとはされない、というものである。安祿山の反亂をなかば予感したものである。⁽³¹⁾

丹青引（卷十三）

……

詔謂將軍拂絹素 詔して將軍に謂ふ 絹素を拂へと

意匠慘澹經營中 意匠慘澹たり 經營の中

須臾九重眞龍出 須臾 九重 眞龍出づ

一洗萬古凡馬空 萬古の凡馬を一洗して空し

玉花卻在御榻上 玉花 卻つて御榻の上に在り

榻上庭前屹相向 榻上庭前 屹として相向ふ

至尊含笑催賜金 至尊 笑ひを含んで金を賜へと催す

圉人太僕皆惆悵 圉人太僕 皆惆悵す

……

廣德二年（七六四）、成都にて、畫技に秀でていた左武衛將軍曹霸（魏の曹操・曹髦の子孫だが、今は平民とされ、零落していた）に贈った詩。天寶の末年、曹霸が玄宗の詔により御馬の玉花驄を描くと、本物に劣らぬ見事なできばえであった。玄宗は満足げに微笑されて黄金を下賜され、天子の馬を養い司る周りの役人たちも、うなだれて感嘆するのみであった、という。

他にも、大曆元年（七六六）秋、夔州にての作「八哀詩 贈太子太師汝陽郡王璣」（卷十六）には、「従人雖獲多、天笑不爲新。王每中一物、手自與金銀（従人 獲多しと雖も、天笑 爲に新たならず。王 一物に中る毎に、手自ら金銀を與ふ）」とある。玄宗の甥である李璣（李瑀の兄）は、日頃より玄宗から寵遇されていたが、連れだつて苑囿に狩りに出かけた折、従者がいくらか多く獲物を獲っても天子がお笑いになることはなかったが、汝陽王が獲物を射當てる毎に、天子は（笑つて）手づから金銀を與えられたのである。従者に對する不笑は、汝陽王に對する笑いを意味している。（「贈特進汝陽王二十韻」（卷一）には、「精理通談笑、忘形向友朋」という汝陽王李璣自身の笑いも描かれている。）

また、大曆元年（七六六）七月、夔州にての作「能畫」（卷十七）にも、「能畫毛延壽、投壺郭舍人。每蒙天一笑、復似物皆春（能畫の毛延壽、投壺の郭舍人。毎に蒙る 天の一笑、復た

物の皆春なるに似たり」とある。玄宗治世の盛時を追懐した諸作のひとつ。漢の郭舍人の如き者が投壺をすれば天子のお笑いを受け、毛延壽の如き者が繪を描けば、百物みな春色を生じるような趣があった、と述べている。

以上いずれも、絶對的な天子の臣下に對する承認、嘉賞ともいうべきゆとりある笑いである。

さらに、變わったところでは、大曆四年(七六九)(五十八歳)、潭州にての作「幽人」(卷二十三)には、「洪濤隱笑語、鼓枻蓬萊池(洪濤 笑語を隠し、枻を鼓す 蓬萊の池)」という「隱者の笑い」が描かれている。昔、王詢らと遊仙の世界に行くことを約束しながら、その後連絡が途絶えたことを述べ、彼ら幽人たちの世界を想像している。蓬萊の仙山の池で舟遊びする彼らの笑い語り合う様子や聲も、今、大きな波に隠されてはつきりとは見えず、聞こえない、と詠じている。この詩は、進退窮まった最晩年の杜甫がしばしば漏らす、自らはついに實踐できなかった隱遁、遊仙への未練を示した一首であろう。

これらの他にも、なおいくつか他者による「笑」表現が見られる。たとえば、「水會渡」(卷九)の「篙師暗理楫、歌笑輕波瀾」には、波濤をものもしない嘉陵江の船頭の、「草堂」(卷十三)の「談笑行殺戮、濺血滿長衢」には、談笑しながら殺戮をくりひろげる成都の叛徒たちの、「復愁十二首(其六)」(卷

李白・杜甫・白居易における「笑」表現について(中)(高橋)

二十)の「閭閻聽小子、談笑覓封侯」には、手柄を立てんとする村里の子どもの、「戲爲六絕句」(卷十二)其一の「今人嗤點流傳賦、不覺前賢畏後生」や、其一の「楊王盧駱當時體、輕薄爲文哂未休」には、前代の庾信や初唐の四傑の價值を解さない世間の人々の、それぞれの笑いが描かれている。

以上、概観したように、杜甫における「笑」表現でまず目につくものは、嘲笑の笑いである。これは、中國古典において、最も普遍的な「笑」表現が、様々な嘲笑であることの自然な反映でもある。また、主として、李白が自己の才能を認められない時に世人からの嘲笑を感じたのに對し、杜甫は、自己の衰老・貧窮・疾病に對する人々からの嘲笑を詠じている。

しかし、自ら「百憂集行」(卷十)詩で、「強將笑語供主人、悲見生涯百憂集」(無理に作り笑いをして援助者の相手をしているが、あらゆる憂いが自分に集まってくるのを悲しみながら見ている)と詠じた杜甫においても、朋友との語らいや飲酒の際には、明るく楽しい直接的な「笑」表現が見られる點は注意されてよい。また、妻子や弟など家族との関わりの中で見られる「笑」表現は、それぞれが独自の印象的な表現であり、何よりも家族を深く愛した杜甫らしい作例であるといえよう。

杜甫の「笑」表現は、概して、李白に比べれば語彙的にも用例数としても少なく、笑いの内實も多種多様とは言えないが、

中國詩文論叢 第三十四集

「陪鄭廣文遊何將軍山林十首」「醉時歌」「自京赴奉先縣詠懷五百字」「哀江頭」「九日藍田崔氏莊」「佳人」「狂夫」など代表的な作にも見られ、杜甫らしい表現の一端を確認することは可能である。少なくとも盛唐の詩人中、杜甫は第二の作例数を示しており、唐詩における〈笑〉表現の確立、定着に、李白とともに一定の作用を果たしていると評することはできよう。なお、杜甫には「笑」「哂」「嗤」などの字を含まぬ諧謔的、自虐的な表現も多々見られるが、前稿と同じくそれらについてはひとまず言及しない。

【注】

- (17) 燕京大學引得編纂處、一九四〇年。
- (18) 杜詩の引用は、清の仇兆鰲『杜甫詩注』（中國古典文學基本叢書）中華書局、一九七九年）に據る。なお、傍線は筆者、以下同じ。
- (19) 吉川幸次郎著・興膳宏編『杜甫詩注』第八冊（岩波書店、二〇一四年、一一〇頁）は、「小儒」も「有識」も董卓や苻堅の歴史的事實に即して考えており、杜甫たちを言うとは解していない。今、ひとまず鈴木虎雄『杜甫全詩集』第二卷（日本圖書センター、一九七八年、一八三頁）や韓成武・張志民『杜甫詩全譯』（河北人民出版社、一九九七年、三〇八頁）の解釋に従っておく。
- (20) この「肉食哂菜色」句の意圖は、あくまで野菜を食べる

者、即ち貧者たる杜甫自身が、富や權勢のある者から嘲笑されていることを詠じたものである。しかし、古川末喜『杜甫農業詩研究』第二章 第十一節 杜甫の野菜好き（知泉書館、二〇〇八年、三五〇～三五八頁）によれば、實際には、夔州時代の杜甫は自ら何種類かの野菜を作り、菜食中心の生活を送る野菜好きであったことが指摘されている。

- (21) こうした経緯については、古川末喜「天寶十五年、杜甫四十五歳、長安陷落——「書き下し口語譯」の試み——」（『佐賀大學文化教育學部研究論文集』第二十七集、二〇一五年八月、一八三～一八一頁、參照）。

- (22) 吉川幸次郎著・興膳宏編『杜甫詩注』第九冊（岩波書店、二〇一五年、六八〇～七一頁）は、「狂夫」を「ばかな男」とし、この句を「ばかな男は老いてますますばかだと笑う」と譯している。

- (23) 陳貽煥『杜甫評傳 上卷』第十章 六、懷人憶舊之什及其它（上海古籍出版社、一九八二年、四六二～四六三頁）、參照。

- (24) 『吉川幸次郎全集 第十二卷』（筑摩書房、一九六八年、三五二頁）、參照。最終句の「仔細看」は、舊注以來、その對象を「茱萸」（茱萸の實／茱萸の實を浮かべた酒杯）とするか、眼前の山水の景色とするか分かれている。しかし、「仔細看」という字義からいえば、ある程度距離を隔てた山水と解するよりは、吉川「九日」（三五六～三五九頁）の説

くごとく、文字通り眼前にある茱萸を杜甫が凝視している
と見るべきである。

また、この詩については、二宮俊博「津阪東陽『杜律詳
解』譯注稿(四)」(椋山女學園大學『文化情報學部紀要』
第三卷(二〇〇三)、一六六―一七二頁。特に注9、20、
33、42)に、詳細な考證があり参考となる。(注40)によれ
ば、清の沈德潛『杜詩偶評』は、「言ふところは酒を把つて
藍水玉山を看る。遽に去るに忍びざるなり。若し茱萸を看
ると云はば、何の意味か有らん」と評しているが、茱萸こ
そ重陽節に不可欠な象徴的なものであり、杜甫の感慨がそ
こに集約されていても何ら不自然ではない。

(25) 杜甫が、李瑀の屋敷とのへだたりを「所思礙行潦、九里
信不通。悄悄素澹路、迢迢天漢東」と形容しているのに對
し、鈴木虎雄『杜甫全詩集』第一卷(二三八頁)は、「この
とき隴西公は澹水の東の方に住みたりとみゆ」と注してい
る。しかし、澹水は、秦嶺山脈に發し、藍田縣を経て長安
城の東三十里のところへ灞水と合流し、渭水に流入してい
る(張永祿主編『唐代長安詞典』陝西人民出版社、二〇一
一年、五頁)。従つて、李瑀の邸宅を澹水の東とすれば、
「九里信不通」と合致しないし(「九里」が實數ではなく、
たんなる近距離を表す意味だとしても)、また貴族の邸宅が
城外にあったとも思われない。

この點は、吉川幸次郎『杜甫詩注』第一冊(筑摩書房、
一九八〇年、二四七頁)が、唐のころは澹水の水を城内に
李白・杜甫・白居易における〈笑〉表現について(中)(高橋)

導いて運河としており、李瑀の家は、その運河沿いにあつ
たのであろう、と解するのが妥當と思われる。なお、澹水
が分流されて、龍首渠となつて城内に引かれ、各處を巡つ
ている點については、平岡武夫編『唐代研究のしおり』第
七 唐代の長安と洛陽 地圖篇「圖版三・九」(京都大學
人文科學研究所、一九五六年)、徐松撰、愛宕元譯注『唐兩
京城坊致 長安と洛陽』(龍首渠「平凡社東洋文庫、一九
九四年、一七六―一七九頁」等、参照。

そうであるとなれば、城内の澹水を「迢迢天漢東」と天
の川に見立てるのはいかにも大仰だが、杜甫には李白に劣
らぬ誇張表現が意外と多くあり、これもその一例といえよ
う。天の川という點では、「得舍弟消息」(卷六)詩にも
「猶有淚成河、經天復東注」(自分の涙が天の川の如く流れ
出し、大空を経て弟のいる東の方へ注いでいるのだ)とい
う表現が見られる。なお、この頃の杜甫の住居については、
長安城外東南の下杜(杜城)または城内と考えられている
が、判然としない。

(26) この二句は、仇兆鰲『杜詩詳注』では「玉局他年無限事」
と「老被樊籠役」に作るが、今、宋本『杜工部集』(臺灣學
生書局、一九七一年)に據つて舉例する。

(27) 古川未喜『杜甫の詩と生活―現代訓讀文で讀む―』(第一
部 成都期 二六 まことに 一笑の樂しみに 供せん」
(知泉書館、二〇一四年、一二三―一二七頁)、参照。

(28) 二宮俊博「津阪東陽『杜律詳解』譯注稿(十四)」(『文化

中國詩文論叢 第三十四集

情報學部紀要』第十二卷（二〇二二）、一四九頁）によれば、津阪東陽は、「索共梅花笑」句について、「索共笑者、言其善會人意。以無情爲有情、亦喜之癡情」と評している。

また、鈴木虎雄『杜甫全詩集』第四卷（四七一頁）によれば、「冷藥」句を、舊注は、これから咲くものとしつつ、杜甫とともに笑わずにはおれないと解しているが、鈴木は、梅花は既に散りかけていて、花もまばらであり、共に笑うに堪えない、とする。思うに、津阪が解するように、梅花（冷藥）は寒さのためにまだ十分に咲いておらず、杜甫と笑いを共にするには堪えられない、というのが妥當であろう。

(29) 「一笑」を「一箭」に作るテキストもある。その場合は、女官の放った一矢で、となるが、仇兆鰲所引の王嗣爽『杜臆』は、前の句に「仰射」と言うからには、「一箭」であることは言うまでもないとする。何よりもこの一段は楊貴妃について述べており、「一笑」の主體は楊貴妃であろう。

(30) 「笑時花近眼」句を、舊注の多くは、歌妓の美しさをいうものと解しており、吉川幸次郎著・興膳宏編『杜甫詩注』第九冊（三四八頁）も、「目元に花が咲きこぼれるような笑顔をいうか」と注し、「にっこり笑えば目元に花咲き」と譯している。

私見では、歌妓が笑うと、杜甫の眼前でまるで花が開いたようだ、とも解せると思う。しかし、前半二句すべてが、歌妓の寶玉で飾られた衣裝を客觀的に描寫しており、「錦纏頭」も歌妓の實際の仕草であれば、この句の「花近眼」も、

比喩ではなく實際の仕草と解する方が自然かとも思われる。今はひとまず鈴木虎雄『杜甫全詩集』第二卷（四七七頁）に従う。

(31) 詳しくは、吉川幸次郎「杜甫私記 續稿 金蝦蟆」（『吉川幸次郎全集 第十二卷』二二六―二三九頁）、參照。